

Geoff Eley

*Reshaping the German Right :
Radical Nationalism and Political
Change after Bismarck*

竹 中 亨

I

ここに取り上げたG・イーリーの著作は、ドイツ第二帝政後半期の右翼についての研究である。右翼といえば、一般には街頭行動などを伴った大衆政治運動が想起されるが、本書ではもっと包括的な概念として使用されており、広義の支配層とほぼ同義だと考えよう。その意味では通常の用語法と一致しないのだが、以下の紹介で述べるように、本書では新旧右翼の対抗という点が一つの重要なモチーフになるので、小稿では著者に従ってこの語を使用する。

さて帝政期の右翼については、今までのところ社会史学派の提出する歴史像がほぼ通説になっていると言ってよい。すなわちその見方に従えば、絶対主義的軍事機構に依るプロイセンの主導下に成立した一八七一年のビスマルク帝国は、その当初、「上から

の革命」に妥協して転向した自由主義勢力との提携の下で経営されていたが、七八年の社会主義者鎮圧法、七九年の関税改革による「穀物と鉄」の同盟締結によって大転換を遂げて保守化し、その後ユンカー・保守右翼勢力は、国民自由党右派を代弁者とする重工業ブルジョアジーとほぼ恒常的に連合して、権威主義体制の権力エリート層を形成し、こうして一九一八年の帝政崩壊までの支配的地位を保持したのである。その間、九〇年代初頭の「新航路」期や、一九〇九年の帝国財政改革問題をめぐる農業・工業の分裂といった中間休止がなかったが、一九一三年の「生産身分のカルテル」*Kartell der schaffenden Stände*を経て、最終的に大戦中のドイツ祖国党（一九一七）に至る結集政策の伝統は、帝政史の基本線と見做されている。したがってこのような観点からすれば、七九年の政策転回が最大の画期として評価されることになるが、その以降の帝政期は、同質の政治構造に基づく連続的な時期と把握されるのである。

本書は以上のような見解を正面から批判して新たな右翼像を対置し、最終的には帝政の政治構造の再解釈を提起しようとする、きわめて野心的な意図をもつ労作である。その主張を支える視角を約言すれば、第一に伝統的右翼に対立する新右翼としての急進ナショナリズムを措定した点で、その政治的具体化である団体主義的圧力団体 *nationalist pressure groups, nationale Verbände* の分析が本書の核となっている。第二に社会の構造変動に伴う九〇年代の政治生活の形態変化、すなわち大衆政治 *popular politics* の出現が、重要な画期として評価されている点である。

イーリーは一九四九年イギリス生まれの若手歴史学者であり、

七四年に学位論文「ドイツ政治におけるドイツ艦隊協会、一八八九—一九一四」The German Navy League in German Politics, 1898-1914, Sussex, D. Phil., 1974 を発表して、現在シガン大学の歴史学の助教授である。彼のこれまでの論文の多くは、西ドイツ社会史学派の見解に向けられており、本書はそれらを総括する位置にあるものと理解できよう。

II

本書は全部で一二章からなり、その構成は次のとおりである。

第一章 序 説

第一部

第二章 名望家政治と国民自由主義の危機

第三章 国粋主義的圧力団体の成立

第二部

第四章 圧力団体の内部

第五章 急進ナシヨナリズムのイデオロギー

第六章 新領域としての大衆政治

第三部

第七章 「全国民的勢力の結集」——理念と現実——

第八章 急進ナシヨナリズムの貢献

第四部

第九章 ヴィルヘルム期権力ブロックの分裂

第一〇章 右翼の再建、一九〇八—一四

第十一章 展望

第十二章 結論——ドイツの特殊性——

以下、各章ごとに内容を紹介してみよう。

第一章では社会史学派の帝政史理解が簡単に紹介され、それに対する著者の批判が要約的に述べられている。批判の対象は、第一に支配層による操作を鍵概念とする政治動員論である。すなわち社会史学派によれば、一九世紀後半の工業化時代に前近代な性格の政治構造が維持されたのは、ひとえに支配層の側での目的意識的な転嫁戦略のお蔭なのであり、その代表例が社会帝國主義なのだが、著者はこの見方は基本的に成り立たないと考える。たとえば、支配層による大衆統合の例としてよく引き合いに出される農業者同盟（九三年設立）の場合においても、西エルベ農民地帯への組織拡大は、単なる「上からの操作」の所産ではなく、同時に「下からの政治化」との交錯を考慮しなければならぬ。この九〇年代の大衆の政治化・活性化こそが、帝政後半期の政治を理解するうえで不可欠の前提と見做されている。この著者の批判は、今述べた経験的な反証だけでなく、理論的観点からも補強されているが、それは第五章で詳述される。

批判の第二点は政治構造の連続性に関するものである。すでに述べたように、従来の説によればヴィルヘルム期の政治構造を規定したのは、七九年に成立し、九七年の結集政策で再確認された農工の共同支配とされるのだが、著者の見解では、「新航路」によって一旦瓦解したこの体制がそのままの形で再建されることはもうなかった。結集政策は支配層内部の軋轢を除くことによって支配を長期的に再確立するのに失敗し、そして大衆の広汎な支持を取り付けられず、支配基盤を不安定なものにしたという点で、一時的な弥縫策を越えるものではなかった。したがって帝政後半

期は、まだ政治の固定的な枠組が変動する現実を儼に圧倒しえた
静的な時代ではもうなく、枠組そのものが絶えず不安定なままに
推移していく期間であった。そしてそのような政治の間隙に登場
してくるのが急進ナシヨナリズムなのである。

次の第一部では、国粹主義的圧力団体の成立とその土壌が扱わ
れる。まず第二章では伝統的な政治生活の形態である名望家政治
Honorationpolitik の崩壊と大衆の広汎な政治化現象がより詳
しく論じられている。そもそも筆者は、九〇年代をビスマルク的
権力ブロックの解体期と捉えるのだが、その意味は、各政治勢力
の力関係・配置状況もさることながら、政治実践のスタイルその
ものに関わっている。すなわち、地域の名士として生得的な声望
をもち、自らの間で閉鎖的なサークルを形成しながら、商業会議
所や半官的農業団体を通じて行政と密着し、非民主的選挙法によ
って政治的発言権を保證されている名望家の支配は、地域レベル
においてビスマルク体制を支えるものだったが、このような支配
のあり方が九〇年代に入って社会下層の政治化によって掘り崩さ
れるのである。その場合右翼との関連で農村における急進主義の
台頭が、とくに注目される。そしてこうした社会下層の反逆に対
して既成政党もそのエネルギーを吸収すべく自己再編を強いられ
るが、国民自由党だけは対応に失敗して相変わらずの名望家政党
にとどまり、その結果生じた自由主義への幻滅は、やがて急進ナ
シヨナリズムの土壌を作ったとされる。

第三章では主要な団体の成立・展開についての概観が述べられ
るが、最も大きなスペースの割かれているのは艦隊協会である。
これはもちろん、著者が以前に学位論文で詳細に研究したためだ

ろうが、本書で国粹主義的圧力団体の具体的な事例が問題になる
とき、他の章でも最もよく引証されるのは艦隊協会であって、た
とえ本書では単なる組織発展史の羅列が意図されているのではな
いにしても、その点素材上の偏りが指摘されよう。さて本章では、
諸団体が決して急進ナシヨナリストの一枚岩の団結によって誕生
したのではないことが強調されている。艦隊協会の場合にも、そ
の結成は伝統右翼―名望家政治家らが急進ナシヨナリストを牽制
するためのものであって、決して後者の主導によるものでなかつ
た。彼らの優勢が確立するのは、穏健派との内紛を経て後のこと
である。そしてこの内紛の中で明らかになった路線上の対立――
御用団体 Regierungssverein か人民団体 Volkssverein か――は、
単に協会だけでなく、急進ナシヨナリズム総体の発展経路を示唆
するものだった。

第二部では国粹主義的圧力団体の内部構造とイデオロギーに焦
点をあてている。第四章はまず、どの団体においても一九〇〇年
頃に幹部層の交代や活動家層の台頭が見られ、それに伴って組織
が名望家的な性格を失っていくことを指摘する。彼らは多くの場
合政治的原体験として国民自由党への失望をもち、そうして過激
なナシヨナリズムへと転じたのだが、同じく同党の旧式な体質で
は汲み上げられなかった大衆の政治化のエネルギーに目を向け、
そこに勢力拡大の基盤を見出したのだった。諸団体は会員の社会
的構成においてもよく似た性格を示していて、最も多いのは専門
職・官吏・企業家であり、その次に職人・農民が来て、大土地所
有者は稀だった。労働者も皆無に等しい。再び艦隊協会の場合を
引けば、とくに幹部・活動家層にブルジョア・専門職が多く、そ

れに対して一般会員は主として中間層の大衆からなっていた。このあたりの叙述はいささか明晰さを欠くが、著者はまるでそれを補うかのように、協会の歴史的意義を考える上では一般会員の動向は重要でないと言う。というのも協会の活動は散発的で、たとえば労働組合が組合員の日常生活の種々の局面を組織したのと同じに論じられるものでは決してないからである。この意味で会員の統合度は小さく、社会帝国主義論の主張するような大衆操作は現実には成功しなかったのであり、むしろ協会の意義は、ナショナリズムの信念に献身した幹部・活動家層に舞台を提供した点に求められている。またたしかに彼らの組織内に占める位置という観点から見れば、諸団体の間にも性格差が認められるのであって、名望家体制を踏襲する植民協会、急進的な活動家層の優越する全ドイツ連盟を両極に、艦隊協会と東部国境協会が中間的形態をなしていたのだが、他方で横断的連絡も密であり、諸団体はより大きなイデオロギーの共同体を形成していたことが述べられている。第五章はそのイデオロギーの分析にあてられており、ある意味では本書の核心をなす。まず社会史学派のナショナルリズム論が組上に上され、その一面性が指摘される。著者によれば、それは次の二つの誤ったイデオロギー理論上の仮説に由来するものである。第一に社会史学派は、支配層の価値体系は社会化化過程の掌握によって大衆に内化されていくという下向的なモデルを前提にしているが、支配的イデオロギーの形成はそのような一方的な拡散・浸透の産物ではなく、従属階層からの反発・抵抗との交差の中で進行する。したがってそれは支配層の計算をそのまま反映していない。著者のこのような理論的構想の支柱はグラ

ムシのヘゲモニー理論であって、権力ブロックの崩壊期であるヴァイルヘルム期は、同時にまたヘゲモニーの再編期であり、急進ナショナルリズムは新しいヘゲモニーの確立過程に位置づけられるのである。第二の批判点もこのような理論に裏打ちされている。すなわち社会史学派のもう一つの難点は、性急にイデオロギーをその社会学的基底に還元しようとして、イデオロギーの相対的自立を認めないことである。しかし、たとえば伝統右翼と急進右翼の決定的な差異は、社会的出自などより、むしろ政治理念に因っている。問題なのは、個々の急進ナショナルリストの次元へと矮小化したうえで社会的連関を問うことではなくて、急進ナショナルリズムそのものを権力ブロックの分裂、政治の形態の変動期における支配層の緊張の表現として、機能的な観点から総体的に捉えることなのである。このような見方において、急進ナショナルリストにブルジョア・ヘゲモニーの確立に努めるグラムシ的知識人を想起するのは決して誤りではないと思われる。

以上のような観点に立つとき、分極化した階級社会を統合する操作的手段として帝政期ナショナルリズムを捉える社会史学派の解釈は、またもや一面的である。それにイデオロギーをめぐる闘争の中で、ナショナルリズムは決して政府の独占的武器ではなく、逆に政府批判の道具にも転用されうるものであって、まさしく急進ナショナルリズムの場合がそうだった。実際、国粹主義の圧力団体の歴史には数多くの政府攻撃の例が見られるのである。そのような体制批判的姿勢を支えたのが人民主義なのであった。

著者によれば、この人民主義こそがヴァイルヘルム期の急進ナショナルリズムの中心の特徴である。正統性の源泉として繰り返し人

民に言及し、既成の諸制度、たとえば政党、議會、邦、場合によつては皇帝さえも、人民と政治の直接的接觸を阻む夾雜物として攻撃する姿勢は、それまでの右翼にはまったく見られなかった。人民主義は通例、伝統的社會層の近代化への反発と考えられてゐるが、新興のブルジョア・新中間層に支えられ、思想的にも自由主義の痕跡を残す急進ナシヨナリズムには、これは該当しない。結局著者は、人民主義という形で支配の正統性の根拠が改めて確認されねばならなかった点を、既成体制が機能不全に陥つてゐる証拠と見る。そうしてこれに既述のヴェルヘルム時代の性格規定を重ね合わせる。すなわちその定式化によれば、ヴェルヘルム期はビスマルク的権力ブロックの解体に伴う危機の時代で、従属階層の自立化・政治化と支配層内の内部分裂という二重の困難に逢着してゐた。このような情況下で、名望家体制に立脚した伝統右翼はヘゲモニーを従前どおり保持する能力を喪失したのであつた。そして急進ナシヨナリズムは、ブロックの再統一とヘゲモニーの再確立を人民主義によつて遂行しようとする努力だと言えるのである。

次いで第六章ではプロバガンダの実態の考察を軸に、政府・既成政党の活動と対比的な国粹主義的圧力団体の活動を際立たせてゐる。通例は建艦キャンペーンで大きな貢献をしたとされる海軍省の宣伝に、否定的な評価しか与えられてゐないのは興味を惹く。

第三部は、独自の勢力としての急進ナシヨナリズムの確立とヴェルヘルム期政治史に与えた意義と、ほぼ要約できよう。まず第七章では、ボーア戦争を契機にして政府と絶縁した全ドイツ連盟が、その政治的孤立の中で次第に自己の立場を急進ナシヨナリス

ムを核に純化し、「國民的反対」の路線を確立する経緯が跡づけられてゐる。その結果、クラウス H. C. Calz、フーゲンブルク A. Eugenborg らの急進派が主導権を掌握し、それまでの方針を変更して内政問題に積極的に関与して行くようになった。その一つの表われが一九〇三年の新綱領で、それは帝國財政改革を謳うことによつて反ユンカーの性格を明らかにし、ひいては結集政策体制への批判を意味するものだった。

第八章では政治史的考察が主になつていて、まずビュロー・ブロックは、左派自由主義にまで及ぶ広汎な「國民的勢力」の糾合に成功して、これに参加した急進ナシヨナリストの信念を強めた。しかしまた同時に、このような公然たる政治への関与は急進ナシヨナリストの間に方針をめぐる議論を惹起し、とくに艦隊協會では一九〇七—〇八年に再度の内紛を招く。だがこの内紛でも大局的には、人民主義的な傾斜をもつ急進派の主張が貫徹し、同派は次第に全ドイツ連盟との關係を深めていった。さらにデイル・テレグラフ事件は急進ナシヨナリズムの確立に大きな刺激を与えた。連盟は「國民的反対」を喧伝して、政府批判の風潮を自己のイデオロギー主導権の確立に利用し、これ以後急進ナシヨナリズムが政党政治レベルに定着する機縁となつた。

第四部は急進ナシヨナリズムによる右翼の再建と本書の結論を含む。第九章ではすでに述べたヴェルヘルム期の二重の困難のうち、支配層の分裂が詳論されている。著者によれば、ヴェルヘルム期の政治を規定していた根本的要因は、工業化の進展に起因する農業・工業の經濟的バランスの崩壊だった。すなわち、工業國としての発展に対応して、國家も軍備拡大、交通網の整備、教育

制度、労使紛争の調停等の、工業の利害により即応した干渉を推進せねばならなかったが、その際の最大の障害は、国家機構内に特権的地位を占めるユニカーの抵抗だった。加えて工業の側としても、以前のように積極的に農業との同盟を求めめる意思は、もはやかなり弱まっていた。経済的地位の低下したユニカーとの間には、一九〇二年に関税改革が実現した後では、利害の一致する経済政策はもう存しなかったからである。

こうして両者の間には亀裂が生じ、それは徐々に拡大しつつあったのだが、決定的な分裂をもたらしたのは、一九〇九年の帝国財政改革問題であった。ユニカーの頑迷な反対に憤激した自由主義勢力は、ビュロー・ブロックを解消して「ハンザ同盟」*Hansebund*を中間層ともども組織する。こうしてユニカーに対抗する自由主義の統一戦線が成立したかに思われたが、しかしこれは決してブルジョアの支配ブロックの確立を意味しないと、著者は言う。それは民主化改革という綱領で内的に統合されていたのではなく、反農業の姿勢と、大衆的支持の獲得のために唱えられた急進ナシヨナリズムによってかろうじて外見を保っているにすぎなかった。国民自由党右派を形成する重工業に至っては、農業への対抗姿勢さえも曖昧で、結局ハンザ同盟を離脱してしまう。

こうした場合で迎えた一九一二年の帝国議会選挙で社会民主党は第一党に躍り出て、支配層に甚大な衝撃を与えた。これを契機に始動し、結局「生産身分のカルテル」の結成に結実する右翼の再建を扱うのが第一〇章である。著者は「カルテル」を単なる結果政策の再版とは見ず、さまざまな点において双方の相違を強調するが、なかでも重要なのは政府との関係である。「カルテル」

は議会内の中道左派勢力に考慮を払うベートマンに対して野党的姿勢を貫いたのであり、これはワイマール期の反政府的右翼の先駆として評価されている。このような反政府姿勢をイデオロギー的に支えたのが、身分制志向と急進ナシヨナリズムであった。とくに後者は結集政策期には傍流的位置に甘んじていなければならなかったのに、今や「カルテル」の基本理念の座を占めるようになる。すなわちユニカーも帝政末期の政治的孤立にあって、徐々に「国民的反対」への嫌悪感を薄め、遂に全ドイツ連盟に主導される新右翼に身を投じたのだった。

第一一、一二章では論旨を要約するとともに、大戦中からワイマール期への展望が示される。ここでは展望だけを取り上げると、ユニカー保守主義右翼がブルジョア右翼に吸収されていく傾向がなお貫徹すると言えるだろう。祖国党においても国家人民党においても、ユニカー出身の保守政治家はもはや指導的地位を占めてはいない。しかし他方で、ヴィルヘルム期の右翼を糾合したはずの後者でも、完全な意味での右翼の再建とはならなかった。それには異質な勢力の寄合所帯という性格が原因でもあったが、根本的には、政治化の一層の進展によって展開してくる中間層のエネルギーをもはや自党の大衆的基盤として取り込む能力に欠けていたためであった。こうして中間層の支持は国家人民党を去っていく。それは換言すれば、ブルジョアジーの運動たる急進ナシヨナリズムが、中間層の内部から発生してきたフェルキッシェな運動——その代表例がナチ党であった——に取って替わられたことを意味していた。

以上、著者の行論に従ってその論旨を紹介してきたが、評者の思わぬ誤解・不手際があるかもしれない。というのも限られた紙数に要約するには、本書の内容は実に豊かだからである。諸団体の組織構造に基く性格差や、従来は操作というレッテルの陰で決して充分には究明されてこなかった宣伝活動の実態やその効果の分析など、本書には多くの示唆に富んだ見解が含まれている。しかし、だからといって詳細なケース・スタディを通じて、従来の通説の採る「上からの視点」に「下からの視点」をただ単に並列的に付加しようという折衷的な研究では毛頭なく、グラムシの理論を援用しつつ、ヴィルヘルム期の政治構造総体の解釈替えを試みる、完結的内容を持った問題提起の書であつて、その点は大いに評価できるだろう。

本書は社会史学派の見解への批判を軸に構成されている。それは個別的な事例をめぐる反駁に終始する「実証的批判」にとどまらず、論敵の帝政史論の核心に触れるものであつて、評者にとつては教えられるところが多かつた。しかしながら、著者の激しい論争の姿勢にもかかわらず、双方に共通する面も少なくないことは注意しておく必要がある。たとえばヴィルヘルム期の政治構造をまずシステムと解して、その枠内において急進ナシヨナリズムの機能を解釈するという著者の方法は、政治の動態をよく視野におさめているにしても、論理としては社会史学派の体制安定化論に類似のものである。いずれにしても、著者の批判が最終的にどの程度有効かについては、評価の分かれるところだろうが、従来

比較的簡単に右翼＝保守＝ユンカーという等式を前提にしてきたわが国の帝政史研究には、少なからぬ検討材料を提供するものと言えよう。

他方で、論点の豊富さに引きずられて、論理構成にやや明快さの欠ける点は指摘されるべきである。重複や強調点の移動が散見されるうえ、概念規定は必ずしも明確でない。加えて著者は論理的にはヴィルヘルム期の性格規定から急進ナシヨナリズムの機能を導出しているのに、叙述はその逆の順で進むので、論理を追跡するのは容易でない。

最後に次の点に触れておきたい。著者は国粹主義的圧力団体の意義を一般大衆にはなく、幹部・活動家層を構成する急進ナシヨナリストに関連づけているが、その結果、伝統右翼への対抗関係が過度に強調され、急進ナシヨナリズムの大衆的受容の面にそれほど注意が払われていない。具体的に言えば、中間層・農民の政治化現象は、冒頭で政治構造の規定条件として重視された後は、ワイマール期にブルジョア右翼の受容能力を越えるほどの展開を見せたことが末尾で触れられるだけである。著者も認めるとおり、「生産身分のカルテル」に中間層が一応対等のパートナーとして参加したという事実が、こういった中間層独自の力量の増大を示すものであるにもかかわらず、たとえば旧中間層を中心に叢生した諸団体の動向は叙述からほぼ脱落している。著者の言うように急進ナシヨナリズムがヴィルヘルム期の現象であつて、名望家体制とフェルキンシュの運動との媒介的役割を果たしたものだと思えば、それはまさしく大衆的政治化のある段階に立脚したものに他ならない。その点で結局は、中間層がなぜ急進ナシヨナリズム

のヘゲモニーを受容したのかという社会史的視角は、支配層の再統一という政党連合論的視角に圧倒されてしまった感がある。

また農業者同盟の評価があまり明確でないのもこれを関連しているように思われる。著者が中南部ドイツの農村急進主義の典型として比較的詳しく述べているヘッセンの反ユダヤ主義運動は、最終的には國粹主義的圧力団体の下へではなく、農業者同盟に吸収されたのであった。このように幅広い受容力をもつ同盟について、著者は一貫して保守党が政治化の進展に対応するために作った大衆組織としての意義しか認めない。こうした評価は、著者が「上からの」操作という観点を採らない以上は、同盟を全くの伝統的保守主義の走狗として捉えることになり、その急進的側面を看過することになるように思われる。

このような問題点を含むものの、ドイツ近現代史の通説的見解に大胆かつ論争的に挑戦する本書は、今後の研究に大きな刺激となることは疑いなく、その意味で多くの同学者の眼に触れることを願う次第である。

(三八七頁 一九八〇年 New Haven and London, Yale University Press)

(京都大学大学院生)

Esikandar Beg Monshi 著

Roger M. Savory 訳

History of Shah 'Abbas the Great

羽 田 正

本書は原題を *Tarīḥ-i 'Alam Arā-yi 'Abbāsī* (世界を飾るアッバース史) とし、十七世紀前半、サファヴィー朝の時代に著わされたペルシア語の年代記である。著者イスカンダル・ベグ(一五六〇?)〜一六三四)はムンシー(書記官)としてサファヴィー朝第五代の王、アッバース一世(大帝)の側近くに仕え、実際に数多くの出来事を自ら体験している。このためその叙述は正確でかつ現実感あふれるものとなり、数多いサファヴィー朝の宮廷史料の中でも第一級のものとして夙に知られている。全巻は三部に分かれたれ、第一部はサファヴィー家の祖先からシャー・アッバースの即位(一五八七)まで、第二部はシャー・アッバースの統治三十年目の一〇二五/一六一六〜七年まで、そして第三部はそれ以後一六二九年のシャー・アッバースの死とシャー・サファヴィーの即位までの歴史を扱っている。一〇〇一/一五九二〜三年、著者がムンシーとなつてからの記述については言うまでもなく、それ以前の記事にも参照すべきところは多く(特にシャー・タフマस्पの死以後)、サファヴィー朝時代の歴史を考える際にはま